

---

# おひさまsummer

詩代 歩溜

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

おひさまsummer

### 【Nコード】

N5909Z

### 【作者名】

詩代 歩溜

### 【あらすじ】

13回目の夏をむかえようとしていた千歳。いろいろあって、孤独だと感じるが多くなっていたある日のこと。

「ぴーなっつ」

わけのわからない声が聞こえて・・・

## プロローグ（前書き）

大切な人と過ごす夏。

1秒でもいいから一緒にいたいんだ。

1秒じゃたりないんだけどね。

## ブログ

太陽出てるね。

今日は雨のはずなのに。

天気予報土さん残念。

でも私は嬉しいな。

昨日は「明日は雨なんだ。」ってすごいがっかりだったのに。

今、晴れててこんなに嬉しいのって天気予報を外してくれたおかげじゃないかな。

最初から晴れって分かってたらこんなに嬉しくなかったはず・・・。

天気予報ありがとーう！

まあ、でも、晴れだからって何かあるわけじゃないんだけどね。

お空の上で喜んでもあなたを想って私が勝手に喜んでただだよ。

きつと今日はいい日だよ！

ニュースの占いでは最悪だったけどね。

## l o s t   f a t h e r

「いつてきます。」

その言葉に対しての返事はない。前までは、「いつてらっしゃい。」の声が聞こえないと部屋中捜しまわって家族を見つけて、無理矢理言わせてた。けど今はそんなことしたって時間の無駄。だって誰もいないもん。いつからだろう？お母さんが帰ってこなくなっちゃったの。最初は寂しかった。去年・・・だから、中1までお母さんと一緒に寝てた私が、今はベッドに一人どころか家の中に一人だよ。不安で仕方なかった。ま、それも最初だけ。今は慣れっこさ。そうか、あれは12ヶ月前のこと。

- - -

「お母さん！私、13歳になった記念に一人で寝る！」

私は自信満々に言った。それもドヤ顔で。でもお母さんは、

「そう、これで広々寝れるね。」

と、このひとことしか言わなかった。この時は何とも思わなかったんだ。

3ヶ月後・・・

お父さんが、仕事から帰ってくるなりこう言った。

「転勤が決まった。だから・・・離婚してくれ。」

その時20時で私とお母さんは夕飯を食べていた。お父さんの分もちゃんとあった。

「本気？なんの冗談？今日はエイプリルフルとちやいますよ。」

茶化すように私が言ったらなぜか怒られた。え？え？なんで私怒られたのかな？

「・・・分かった。」

はい？分かった？all right？イヤイヤ、私全然分からない。お母さんは何が分かったの？離婚だよ？離れ離れだよ？訳が分からないよ・・・。

「お母さん！お父さん！なんなの？説明してください。」

私が説明するよう催促すると、お母さんがクリップでつままれたように開きずらそうな唇を開けて説明してくれた。

「あのね、お父さんはね、私たち以外に大切な人がいるんだって。だから、私達は離れなきゃいけないの。一緒にいちゃいけないの。ずっと黙っててごめんね。千歳<sup>ちとせ</sup>はお母さんとずっと一緒にいようね。」

え・・・？私はいまだに状況が理解できない。けど、お母さんは泣いている。もう、それだけでただ事じゃないことが分かった。

「お母さん、泣かないで！お父さん！私たち以外に大切な人がいるってどういうこと？」

お父さんは真顔で答えた。

「お父さん、好きな人がいるんだ。でも、お父さんにはお母さんや千歳がいるから……。今まで何もなかった。けど、お父さん、福岡に転勤が決まったんだ。それで、その人に、「一緒に住もう。」って言われて。お父さん断れなかった。だから、こんな中途半端はいけないと思って、こうすることに決めたんだ。」

お父さんの言葉を聞いて、なぜか悲しいとか、寂しいとか感じなかった。感じたのは怒りだけ。

「私、13年生きてて、幸せじゃないって感じたことなかった。でも今日初めて感じた。ああ、私、不幸だな。って。こんな父親持ったこと。ううん。そうじゃない。ずっと不安でいっぱいだったお母さんの気持ちに気付けなかったことだよ！この上ない親不孝者になった者同士一緒にいたってさ。丁度良かったんだよ。離れることになつて。でも、一緒にしないでよね。お父さんは最後までお母さんを幸せにできなかったけど、私はこれからお母さんを幸せにしてみせるんだから！」

そう言い放った私の目にはもう涙が溢れてたことは言うまでもないよね。私が怒りを感じた相手って、こんな最低なお父さんにじゃなくて、自分自身だったんだね。

お父さんのために用意してあった夕飯が食べられることなく冷たくなって、テーブルの上で佇んだ。

数日後



お父さんは家を出て行った。お金のことはちゃんとするみたい。私にはよく分からなかったけど。

その日も、お父さんがいなくなったこと以外は何も変わらないこの家で、私はお母さんと夕飯を食べた。私の好きな牛丼だった。紅シヨウガたつぷりの。私はいつもなら、夕飯の時に、その日あった出来事を話したい放題話していた。お母さんはちゃんと聞いてくれるの。でもね、その日は何も話せなかった。お父さんのこと以外の話題がなかったんだ。沈黙が続く。お母さんだから、沈黙しても別に気まずくはないんだけど、なんか落ち付かなくて牛丼の味が分からなかった。そんな時、お母さんが何か思い出したように話した。

「お父さんがさ、離婚の話を出した時、千歳がお父さんになんか話してたよね。あれね、お母さんすごく嬉しかった。でもね、千歳はひとつだけ間違えてたよ。『お父さんは最後までお母さんを幸せにできなかった。』って言ったでしょ。あれね、違うよ。」

「え・・・?」

「お父さんだってひとつだけかけがえのないものくれたよ。」

「・・・?」

「千歳だよ。お父さんは千歳をくれたんだよ。ほら、ひとつ幸せくれたよね。」

涙目で話すお母さんの顔を見て、私は大泣きした。さっきまで味のなかった牛丼が、いきなり塩味になった。そんな私を見て、おかあ

さんはやさしく笑ってた。

-  
-  
-  
-

## ぴーなっつの出会い

もう7月。あと2週間で誕生日が来る。去年まで、「たんじょうび」と聞けば、

(プレゼントはなにもらおう?)

それしか考えてなかった。たった1年しか経ってないのに、1年前の自分がひどく幼く感じる。いや、大人ぶってるわけじゃないんだよ?でもさ、今年は誕生日どころじゃないんだよね。早くお母さんをみつけないきゃ。このままじゃlonely Birthdayになっちゃうよ。

キンコーンカンコーン

鐘が鳴った。よし、お弁当だ。今日も屋上でランチタイム。屋上とかベタなスポットなのに案外誰も使わないんだよね。あ、みんな教室で食べるもんね。普通は。まあ、いいや。お昼食べようっと。

風が気持ちいい。空はこんなに晴々としてるのに、私だけ何でこんなにモヤモヤしなきゃいけないの?ほら、さっき教室にいたクラスメイトだってみんな、何も考えなくて、ただ平凡に暮らしてるんだよ。この世に神なんて存在しないんだ。平等なんてありえない。

私は卑屈。妬みつばくて僻みつばい。相手に悪く思われたくないから誰にも愚痴など言ったことがない。だけどそれは、“いい子”なんかじゃなくていい子ぶってるだけなんだ。家でも外でも。

こうして屋上に来るといつもこう思う。  
「なんで私だけ?」って。

私以外の人もみんなモヤモヤすりゃいいんだ。って……。モヤモヤの原因は大体分かってる。けど、その原因無くそうってする気持ちはないわけじゃないのに、怖くてさ。できないの。

私って可愛そうなのかな……。

もってきたお弁当箱を開きもせず、青い空を眺めてただぼーっとしてたら、なにか幻聴のようなものが聞こえる。

「……つつ？」

なんか男の子のような声。低くて。耳をふさいでも聞こえるの。体の底から響いて聞こえてくるの。重低音って言うのかな？なんか眠くなってきた。

「ぴーなつつ。だってば！」

今度こそはつきり聞こえた。後ろだ。

振り向くとそこには男の子が立っていた。

「な……に……？」

あれれ？なんで私ビビってんの？男子苦手だから？いや、そんなことじゃないな。あ、苦手だけでも。

「やっと気付いた？オレ、9ヶ月も一緒にいたのにな。」

はひ？9ヶ月？

「それって……。」

「なに？」

「ストーカー……？ひいひい……？！」

あろうことか私は取り乱してしまった。

「オレがストーカー？違うよ。ストーカーってあれだろ？あとついで、電柱柱の陰でんちゅうのかげからこっそり観察して、家まで着いて行って、そんなもって盗撮とかしちゃうやつだろ？」

「そうだね。詳しいんだね。」

冷めた目で見てやった。

「だからちげえって。話を聞けい！」

とりあえず私はその、“ぴーなつつ男”の話を書くことにした。

## ぴーなつつのわけ

ぴーなつつ男が話し始める。

「ちゃんと聞けよ？めんどくせえから1回しか言わねえぞ？あのな、9ヶ月前って言ったらさ。率直に言うけどおまえの父ちゃんが出てった時期だろ？そう、その時くらいからオレはおまえの傍で暮らすことになったんだ。もちろん見えなかっただろうな。今までは。それはおまえの孤独な気持ちが小さかったからだ。でも今、オレがこんなにハッキリ見えるってことは……。おまえは相当孤独なんだよ。」

苦笑いで話すぴーなつつ男。なぜだか無性にイラついた。

「私孤独じゃないよ！なにそれ！全然孤独じゃない！」

全力否定してやった。何よこの男は。初対面の人に、孤独だ、孤独だって。失礼じゃない。

「だから初対面じゃねえーんだって。」

はい？

「何勝手に人の心読んで！個人情報保護法を無視する気？！」

誰かと話すのなんて久しぶりだった。だからなぜか私のテンションはおかしかった。

「おまえのどの辺が孤独じゃないって？」

人の質問は無視かい……。

「どの辺って……。じゃ、じゃあ、逆に私のどの辺が孤独なの？」

「んー？何個言えればいいんだ？とりあえずまあ、強いて言うなら……。自分の思ってることちゃんと伝えられない？ってか伝えられる相手がいないとこかな。」

腕組みしながら、すました顔でいうぴーなっつ男。むかつくけど、まあ、言ってることは正しいかもしれない。私、思ったことどころか、会話が出来る相手すらないもん。

あれ？なんでかなあ。この人には私、普通にものを言うことできる気がする。さつきもちゃんと、

「自分は孤独じゃない。」

って伝えられた。結果それは間違いだって気付かされちゃったけど……。なんか途端にこのぴーなっつ男に心開けてきた気がした。

「オレに言いたいこと言えるのはな、オレとおまえはぴーなっつだからだ。」

「はあ？」

ごめん。前言撤回だ。心開けた？こんな変人に？ないない。  
なにがぴーなっつ？ってかどんだけぴーなっつ好きなの？この男は。

「やっぱ変な顔したな。ははっ。今、意味分かんない奴だっと思ってただろ？当然だけどな。」

「……。」

「ぴーなつつつてさ、どんな状態だ？」

「え……？どんな状態って？えっと、一つの実に、二つタネが入ってて……。」

「そうそう。そのタネがオレとおまえ。」

「はあい？」

「オレがおまえの傍にいることはおまえが生まれた時から決まっていた。驚いた？」

「おお……おふうう……。驚いた。」

「いまだに理解できてない……。生まれた時から決まってた？ええっ？！」

「え、でもさ、私の傍に来たのは9ヶ月前なんでしょ？おかしいじゃない。」

「ああ、傍に来たのはな。でもそれより前からおまえのことは知ってた。」

「よく分かんないなあ。なんで9ヶ月前なの？お父さんのことが関係あるって言ってたけど……。」



「それはおまえが寂しがってたからだ。んー、孤独ってやつかな。」  
またそれか。孤独か。ってか人の心をまた読んだのか……。まあいいや。

「私が孤独だからアンタは私の傍に来たの？」

「そうそう。あとさ、オレ、ぴーなつつ男じゃない。」

しまった。この男は心が読めるんだった。

「じゃあなんていうの？」

「<sup>た</sup>太陽……だよ。」

小さい声で、この目の前にいる太陽は言った。

「太陽か。ふふ。温かそうだね。」

私がそう言つと、

「あれ？笑わないの？」

すごく不思議そうな顔して聞いてきた。

「え、なんで笑うの？」

ああ、私も質問返ししちゃった。

「うん。まあいいや。今度話すよ。それじゃ、教室戻るか。」

「うん。」

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n5909z/>

---

おひさまsummer

2011年12月21日20時55分発行